
こども

「各国のいじめ防止対策とスクールソーシャルワーカーのいじめ対策の動向」

日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科
博士後期課程 佐藤 浩一

I. はじめに

世界的にいじめが大きな社会問題となったのは1980年代前半あたりからで、現在では各国で様々ないじめ防止プログラムが実施されている。世界的に普及している主なものとしては、ルールや規則を重視し全校的にシステムティックに取り組まれる「オルウェーズいじめ防止プログラム」(以下OBPP)、Social-Emotional Learning(以下SEL)をベースに、暴力防止を目的とした教育プログラムである「セカンドステップ」、話し合いや対話によって個人やクラス全体の関係性を改善する取り組みで、当初は司法の分野で発展し、現在は世界各地の教育現場で広まりつつある「修復的対話」などがある。いじめ対策制度について、米国では2004年より反いじめ国家キャンペーンを展開し、2013年現在ではモンタナ州以外すべての州で「いじめ防止法」が制定されている(The US Department of Health and Human Services, 2013)。その中身は、いじめの定義の明確化やその禁止、いじめ対策の徹底と責任等が明文化されており、学校にはいじめ防止計画の作成やいじめへの具体的対応の実施が法的に求められている。そのためアメリカ国内では数多くのプログラムが開発・実施されている。イギリスにおいても、学校長にいじめ防止プログラムの作成義務があり、主に予防教育に主眼をおいたプログラムが行われている(飯野, 2012)。

II. 国内のいじめ対策の現状

日本では、世界でもいち早くいじめが社会問題化し、先進的にいじめ研究がなされてきた。い

じめの構造や要因などの内容研究(森田, 1985)や、国際動向研究(森田, 1998; 土屋・スミス・添田・折出, 2005)、展望研究(松尾, 2002; 戸田ら, 2013)などが報告されている。対策研究については、中澤(2001)や竹内(2010)の「ピア・サポート」、岡安・高山(2004)の「ピース・パックプログラム」、安藤(2012)「いじめの心理教育実践研究」等の報告がなされているが、質的・量的に研究課題は多く、2001年から2013年までの国内のいじめ研究をレビューした下田(2014)は、「効果測定 of 客観性も含め発展途上の段階」であることを指摘しており、国内では体系的ないじめ防止プログラム研究は殆どなされていない(松尾, 2002; 飯野, 2012; 北川・小塩・股村・佐々木・東郷, 2013)とされる。また、世界の50種類以上のいじめ防止プログラム、44件のいじめ防止に関する評価研究を統合分析した、Farrington & Ttofi(2009)の「メタアナリシス」論文にも、日本の評価研究は取り上げられていない。2013年には国内で初となるいじめ関連法「いじめ防止対策推進法」が施行され、いじめ担当組織の設置と職員の配置、調査・報告の実施、警察との連携、懲戒・出席停止処分の検討、重大事態への対応等が明記されたが、これらは役割や責任の明確化という点では評価できるものの、事後的な対応が主で、具体的な予防の取り組みについては殆ど触れられていない。現在の日本では、いじめ対策は基本的に各学校や地域で講じること(文部科学省, 2013)とされ、具体的な取り組みについては、それぞれの学校に任されているのが現状(北川ら, 2013)である。

2008年よりスクールソーシャルワーカー(以下SSWer)制度が日本でも導入され、いじめケースへの対応やいじめに関する教職員へのコンサルテーション機能が期待されている(文部科学省2008)が、SSWerのいじめ防止対策の検討は、

山下(2010)の修復的対話の応用研究以外殆ど見られず、SSWerのいじめ対策は事後的なアフターケアに留まっているのが現状と思われる。

III. 各国のいじめ防止対策・

プログラムの分析

SSWerのいじめ防止対策を検討するにあたり、各国のいじめ防止プログラムやいじめ防止に関する報告書等を把握し分析した。重点的に分析した文献は以下の通り。(尚、以下の報告は筆者の修士論文を引用し、一部追加・修正)

1) オルウェーズいじめ防止プログラム(OBPP)

International Bullying Prevention Association(以下国際いじめ防止協会)があげているベストプラクティスプログラム。ノルウェーの心理学者ダン・オルウェーズ博士が開発。2012年現在、米国47の州8000の学校、世界12か国で実践。プログラム実施校はいじめが平均20~70%減少することが報告(Oweus & Limber, 2007)されている。原本から分析。

2) セカンドステップ、Step to respect program (STR)

国際いじめ防止協会があげているベストプラクティスプログラム。NPO法人Committee for Children(以下CFC)が開発。セカンドステップは米国の約4割の学校、世界70ヶ国の約900万人の子供にリーチ。国内では品川区立小学校(全37校)をはじめ、全国の保育園・児童養護施設・児童相談所など約320の施設で導入。これまでに約23,000人の子供にリーチ。STRはいじめ防止に特化したプログラムで、米国にてランダム化比較試験が行われ、いじめ防止の効果が確認(Brown, Low, & Smith, 2011)されている。両プログラムとも原本から分析。

3) Limber,P.S., Snyder,M. のいじめ防止のベストプラクティス

OBPPや米国保健省、国際いじめ防止協会などで引用されているいじめ防止に関する報告書。

4) Farrington,D.P., Ttofi,M.M. のメタアナリシス 世界の53種類のプログラムの40以上のいじ

め防止に関する評価研究を統合分析(メタアナリシス)した2009年(2011年追加報告)の米国の論文。その報告の中で約10のいじめ防止のキーエレメントをあげている。

5) 米国保健省のキーエレメント

いじめ統計データや対策の情報提供をそのホームページで行っている。その情報量は他の関連省庁(米国教育省・司法省)よりも充実している。

6) Committee for Children のキーエレメント

CFCが開発したセカンドステップは、2001年に米国教育省より100以上ある教育プログラムの中から最優秀賞に選ばれている。CFCは子どもの暴力防止プログラムを中心に、いじめや虐待防止のプログラム開発も行っている。いじめ対処のキーエレメントを述べている。

7) CASEL (Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning) のいじめ防止のストラテジー

世界のSELプログラムのEBP性について評価研究しているイリノイ大学の研究機関(NPO法人)。2011年に213のSELプログラムの効果に関するメタアナリシスを実施。いじめ防止のストラテジーを報告。

以上は重要なプログラム・報告とおもわれたので、ニュアンスから逸れないよう、原文から分析した。

各プログラム・報告書からいじめ防止に関するキーエレメントを抽出し一覧にした。更にそれらをカテゴリー分析した結果、6つのキーエレメント(SEL、いじめ規範・ルール、いじめ教育、スーパービジョン、エコロジカルアプローチ、システム力)に分類できた。

表1 いじめ防止のキーエレメント一覧

セカンドステップ	OBPP	Limber,P.S., Snyder,M.(2004)	メタアナリシス (Farrington,D.P., Ttofi,M.M. 2009)	米国保健省	Committee for Children	CASEL(2009)
<ul style="list-style-type: none"> SEL (エンプラー、情動のマネジメント、問題解決のスキル、フレンドシップ、アサーション) 	<ul style="list-style-type: none"> いじめ規範、ルール ペナルティー 全校的アプローチ システム化 	<ul style="list-style-type: none"> 学校風土へのフォーカス いじめアセスメント 学校スタッフや両親の取り組みへの参加 いじめ対策委員会、組織の設置 いじめ研修、トレーニングの実施 方針やルールの策定 大人のスーパービジョンを増やす 適切で継続的な介入 クラスミーティング、ディスカッション 取り組みの継続 	<ul style="list-style-type: none"> 親へのトレーニング 校庭のスーパービジョン 懲戒メソッド スクールカンファレンス 両親への情報提供 クラスルームルールとクラスマネジメント ビデオ教育 ピアワーク 継続的取り組み グループワーク 	<ul style="list-style-type: none"> 態度、行動、規範の変容 いじめ規範 SEL能力 	<ul style="list-style-type: none"> いじめ規範を変えること SEL能力 いじめの正しい認識 	<ul style="list-style-type: none"> いじめアセスメント トレーニング ルールと報告 規律・方針の明確化 大人のスーパービジョン 大人のモデル(手本) 良好な友達関係をプロモート クラス風土の改善 SEL学習・活動 (教育的・支援的)介入 親の参加

表2 いじめ防止の6つのキーエレメント

SEL	規範・ルール	いじめ教育	スーパービジョン	エコロジカルアプローチ	システム化
<ul style="list-style-type: none"> SEL能力(4) 態度、行動の変容 両行な友達関係をプロモート 	<ul style="list-style-type: none"> いじめ規範・ルール 方針やルールの策定 クラスルームルール 規範、方針の明確化 規範の変容 いじめ規範を変えること ルールと報告 ペナルティー 懲戒メソッド 	<ul style="list-style-type: none"> いじめの正しい認識 ビデオ教育 ピアワーク グループワーク 両親への情報提供 大人のモデル 親へのトレーニング 教育的、支援的介入 	<ul style="list-style-type: none"> 大人のスーパービジョン 大人のスーパービジョンを増やす 校庭のスーパービジョン 適切で継続的な介入 	<ul style="list-style-type: none"> 全校的アプローチ 学校風土へのフォーカス 学校、両親の参加 クラス風土の改善 親の参加 	<ul style="list-style-type: none"> システム化 いじめアセスメント(2) いじめ対策委員会化の設置 研修、トレーニング(2) 取り組みの継続(2) スクールカンファレンス クラスマネジメント クラスミーティング・ディスカッション

子どもの暴力行為やいじめなどの諸問に対応する具体的な方策として、近年教育界で注目されているのが『社会性と情動の学習 :Social-Emotional learning』と呼ばれる教育アプローチである。特定のSEL理論があるわけではなく、数多くの心理・教育プログラムの総称(小泉令三, 2008)である。SELは多くのEBPが報告(Durlakら, 2011)されていて、SELプログラム実施校は非実施校と比較し社会性や学業成績が高いことが科学的に確認されている。いじめ防止の効果も確認されており、米国ではいじめ防止に関するランダム化比較試験(Brown, Low, & Smith, 2011)が行われている。各国のいじめ防止プログラムを概観すると、その多くでSELの要素(共感性を高めるレッスンや、感情のコントロール、いじめに遭遇した時の具体的対応の学習、など)が確認できる。「SEL」の高いエビデンス性や多くのプログラムで「SEL」の要素が採用されていることなどから、これから

のいじめ防止対策やプログラムは「SEL」が働きかけの中心となるであろう

IV. スクールソーシャルワーカーのいじめ防止 対策の取り組み

米保健省(2014)は「いじめの影響はたいへん深刻で、健康や精神衛生、学習に影響し、いじめを受けた子どもはいじめを受けていない子どもと比べて、うつ病、自傷、自殺念慮、自殺未遂に陥りやすい」としている。いじめは命に係わる極めて重大な問題である。この様な状況下で、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーのいじめ対策への期待が高まっており(松尾, 2002; 文科省, 2008)、相談・助言や心のケア、他機関・家庭との連携、環境風土改善への取り組み、などが求められている。SSWerらの支援について、いじめは長期間に及ぶトラウマや、いじめ自殺など侵襲性が大変高い。人の人生や命に係

わる大きな問題であるため、心のケアや個の尊重、パートナーシップ（寄り添い・伴走）といった支援機能が重要となる。

またワーカーらのいじめ予防活動の検討に関して、松本・柳生（2014）は、ドイツの小学校におけるいじめ防止プログラムについて現地調査を行い、ソーシャルワーカーがモビング（いじめ）の仲裁、調停、解決の役割を担っており、ワーカーが中心となって生徒に社会性や学校生活上の問題解決能力「ソーシャルスキル」を高めるための授業を実施していることを報告した。カナダのトロント市においても、スクールソーシャルワーカーがいじめ防止プログラムを実施していることが報告（文部科学省，2006）されている。また、いじめ対策としてだけではなく生活問題の予防支援として、アメリカ・イリノイ州ではSSWerがSELプログラムを実施（山野・徳永，2009；馬場，2011）していたり、国内でもSSWerがソーシャル・スキル・トレーニングとして、感情表出などの練習を行っている地域があることが（山野，2015）報告されている。社会性の向上を目的としたソーシャルスキルの習得を、個と社会（環境）との関係性の適正化を目指すソーシャルワーカーが担うことは、機能と役割の一致という点で整合性があり、今までのソーシャルワーカーのいじめ対策は、いじめ発生後の事後的支援が中心であったが、これらの報告からワーカーらの具体的な予防活動や対応策が示され、ソーシャルワーカーの新たな実践モデルの一つになりうるものとも考えられる。

更に、いじめ対策における環境へのアプローチに関して、いじめは環境風土に大きく影響され生まれる（Swearer & Espelage，2011）とされるため、学校・家庭・地域の環境改善のといった長期的な視点に立った取り組みについても、ソーシャルアクション機能（社会環境への働きかけ）を持つソーシャルワーカーには求められてくると思われる。

今後のSSWerのいじめ対策には、予防と対応の両面でのアプローチが必要となるであろう。

V.まとめ

各国のいじめ防止プログラムを概観すると、働きかけは「ソーシャル・エモショナルラーニング」が中心となっており、プロセスについても手順が確立化（システム化）されつつある。近年のいじめ対策は、当事者だけへの働きかけから、学校・家庭・地域も含めた全校的取り組み（エコロジカルアプローチ）へのシフトや、諸科学やメソッドの統合化などの傾向がみとれ、今後のいじめ対策は、働きかけの対象とその特性が包括的なアプローチが必要と思われる。プログラムの実践者については、子どものソーシャルスキル習得の必要性やいじめ防止におけるエコロジカルアプローチの高まりから、SSWerが中心となっていじめに取り組むようになるであろう。SSWerのいじめ防止対策を検討する上では、先述したいじめ防止の6つのキーエレメントを更に精査し、その取り組みにどのように活かしていくかの検討が必要になるとと思われる。

今後の学校のいじめ防止対策は、SSWerが重要な役割を担うことになるであろう。

文献

- 安藤美華代 (2012). 小中連携による児童生徒のいじめを予防する継続的心理教育 ― “サクセスフル・セルフ 2010” を用いた実践研究 ― 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 151, 13-22.
- Brown.C. Eric, Low.S, Smith.H.B, & Haggerty P.K, (2011). School-Randomized Controlled Trial of Steps to Respect: A Bullying Prevention Program. School Psychology Revie 40, Issue 3 (2011) pp. 423-443.
- Committee for Children. Second Step Bullying Prevention Unit Reviw of Research. <http://www.cfchildren.org/Portals/0/SS_BPU/B_PU_DOC/Review_of_Research_BPU.pdf> (2013/12/10 アクセス)
- Committee for Children. (2001). Step to repect A Bulling Prevention Program Level 1, Level 3 Skill Unit.
- Committee for Children. White Paper:social-emotional learning and bullying prevention.

- <http://www.cfchildren.org/Portals/0/Home/H_DOC/SEL_Bullying_Paper.pdf>(2013/12/10 アクセス)
- Durlak, J.A., Weissberg, R.P., Dymnicki, A.B., Taylor, R.D., and Schellinger, K. (2011). The Impact of Enhancing Students' Social and Emotional Learning: A Meta-Analysis of School-Based Universal Interventions. *Child Development*, 82, 405-432.
- Farrington, D.P., Ttofi, M.M. (2009). School-Based Programs to Reduce Bullying and Victimization. *Campbell Systematic Review*, Pp.63-75.
- 飯野眞幸 (2012). 学校におけるいじめ防止プログラム (ダイジェスト版) 高崎市教育委員会
- 北川裕子・小塩靖崇・股村美里・佐々木司・東郷史治 (2013). 学校におけるいじめ対策教育—フィンランドのKiVaに注目して— *不安障害研究*, 5(1), 31-38.
- 小泉令三 (2008). 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践 ミネルバ書房
- Limber, P.S., Snyder, M. (2004). What works and doesn't work in bullying prevention and intervention. *Student Assistance Journal*. (winter 2004):Pp.16-19.
- 松本浩之・柳生和夫 (2014). ドイツの学校におけるいじめ防止プログラム *生活科学研究*, 36, 29-41.
- 松尾直博 (2002). 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向 —学校・学級単位での取り組み— *教育心理学研究*, 50, 487-499.
- 森田洋司 (1985). 学級集団における「いじめ」の構造 *ジュリスト*, 836, 29-35.
- 森田洋司 (総監修). (1998). 世界のいじめ：各国の現状と取り組み 金子書房.
- 文部科学省 (2006). 「学校等における児童虐待防止に向けた取組について」(報告書) 学校等における児童虐待防止に向けた取組に関する調査研究会議
- 文部科学省 (2013). 平成 24 年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
- <<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001016708>> (2013/12/1 アクセス)
- 文部科学省 (2013). 生活指導リーフ増刊号いじめのない学校づくり「学校いじめ防止基本方針」策定 Q & A 文部科学省国立教育政策研究所
- 文部科学省 (2008). スクールソーシャルワーカー実践活動事例集 文部科学省
- 中澤朋江 (2001). いじめに取り組んだ子どもたち—伊達中学校での実践から— *教育臨床心理学研究紀要*, 2, 81-96.
- 岡安孝弘・高山 巖 (2004). 中学校における啓発活動を中心としたいじめ防止プログラムの実践とその効果 *カウンセリング研究*, 37, 155-167
- 奥地圭子 (2007). こどもに聞くいじめ フリースクールからの発信 東京シュレ出版
- Olweus, D., Limber, S.P. (2007). *Olweus Bullying Prevention Program Schoolwide Guide*. Hazelden.
- Olweus, D., Limber, S.P. (2007). *Olweus Bullying Prevention Program Teacher Guide*. Hazelden.
- Smith, P.K., Pepler, D., Rigby, K. (2004). *Bullying in Schools —How Successful Can Interventions Be?—* Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Swearer, S.M., Espelage, D.L (2011). Expanding the Social-Ecological Framework of Bullying among Youth: Lessons Learned from the Past and Directions for the Future [Chapter 1]. *Bullying in North American Schools*, 2nd ed., chapter 1, p. 3-10. Routledge.
- The US Department of Health and Human Services. [Stopbullying.gov](http://www.stopbullying.gov) Bullying Prevention & Response Base Training Module. <<http://www.stopbullying.gov/prevention/training-center/training-module-powerpoint.pptx>> (2014/01/14 アクセス)
- The US Department of Health and Human Services. Stop Bullying Now! Website Bullying statistics. <<http://www.stopbullying.gov/index.html>> (2012/11/25 アクセス)
- The US Department of Health and Human Services. Stop Bullying Now! Website Policies & Laws. <<http://www.stopbullying.gov/laws/>> (2013/11/25 アクセス)
- The US Department of Justice. Office of Juvenile Justice and Delinquency Prevention, Bullying. <<http://www.ojjdp.gov/index.html>> (2013/10/15 アクセス)
- 竹内和雄 (2010). 市内全中学校生徒会執行部で取り組むピア・サポート実践研究—大阪府寝屋川市中学生サミット「携帯ネットいじめ撲滅劇」を中心に— *ピア・*

サポート研究, 7,19-27

戸田雄一・青山郁子・金剛知征 (2013). ネットいじめ研究と対策の国際的動向と展望 〈教育と社会〉研究, 23, 29-39.

土屋基規・P.K スミス・添田久美子・折出健二 (編著).(2005). いじめととりくんだ国々：日本と世界の学校におけるいじめへの対策と施策 ミネルヴァ書房.

山野則子 (2015). エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク 現場で使える教育行政との協働プログラム 明石書店.

山野則子・徳永祥子 (2009). SSWに必要なEBPを示せる力とその養成方法～シカゴのアーバンミッションに基づく教育や実践～報告書 大阪府立大学

山下英三郎 (2010). いじめ・損なわれた関係を築きなおす ―修復的対話というアプローチ― 学苑社